

ふるまちいせき

古町遺跡

—第1次発掘調査概要報告—

平成30（2018）年3月
久留米市教育委員会

序

久留米市は「日本一住みやすいまち・久留米」の実現を目指して、充実した都市機能を整備し、素晴らしい地域資源にさらに磨きをかけるまちづくりを進めています。久留米市は古くから水路と陸路の要衝としての位置を占め、市内では数多くの文化財が残されています。

今回の調査は、筑後川の北岸にあたる北野町で実施しました。確認された遺構や遺物から中世以降の人々の生活を知る貴重な資料を得ることが出来ました。

今回の成果を収録した本書の発行を通して、久留米の歴史と文化財保護に対する理解を得るとともに、市民の文化や教育の向上に貢献できれば幸いです。

なお、今回の発掘調査に際して、土地所有者の■■■■様をはじめ、近隣住民の皆様、関係者各位につきましては、多大なご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

平成 30 年 3 月 31 日

久留米市教育委員会
教育長 大津 秀明

例 言

1. 本書は、宅地造成及び共同住宅建設に先立ち、平成 29 年度に■■■■氏の委託を受けて実施した、古町遺跡第 1 次調査の発掘調査概要報告書である。
2. 調査は久留米市教育委員会が主体となり、市民文化部文化財保護課の神保公久と大隈彩未が担当した。
3. 遺構実測図の作成は、神保と大隈、田中樹子、藤木幸子が行い、浄書は神保、大隈が行った。
4. 遺構写真はマミヤ RB67 を用いて神保と大隈が撮影し、空中写真は（有）空中写真企画に委託して撮影した。
5. 図面の方位は全て座標北を示す。基準点の座標は、国土調査法第Ⅱ座標系（世界測地系）を用いた。なお、熊本地震に伴うパラメーター補正は行っていない。
6. 土層の色調は『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社、平成 9 年）に拠った。
7. 出土遺物・図面等諸記録は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・保管されている。
8. 本調査の略記号は F RM-001、調査番号は 201716 である。
9. 本書の執筆・編集は神保指導のもと大隈が行った。

本 文 目 次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2
III. 調査の記録	4
IV. 総括	5

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

本調査は、宅地造成及び共同住宅建設に伴う事前の発掘調査である。平成 29 年 6 月 23 日、土地所有者の■■■■氏から、久留米市北野町十郎丸 1420 外における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である古町遺跡にあたり、試掘調査でも遺構が確認されたため、発掘調査が必要である旨を回答した。同時に土地所有者から発掘調査の依頼が提出されたため、9 月 12 日付で土地所有者 ■■■■氏と久留米市は、古町遺跡第 1 次調査の協定書と委託契約を締結した。調査範囲は宅地造成予定地で、対象面積 2,598 m²のうち、削平により消滅する約 400 m²を対象とした。現地での発掘調査は、10 月 19 日に着手して 11 月 30 日に終了し、平成 30 年 3 月 31 日に整理作業を終了した。

2. 調査の体制

調査主体：久留米市教育委員会	教 育 長：大津 秀明
調査総括：久留米市 市民文化部	部 長：野田 秀樹
	文化芸術担当部長：甲斐田 忠之
	次 長：西村 信二
文化財保護課	課 長：馬場 博文
	課長補佐：山崎 万里子 白木 守（兼主査）
	主 査：水原 道範
	事務主査：塚本 映子
	庶務担当：豊福 早苗
	調査担当：神保 公久 大隈 彩未
	整理担当：米澤 美詠子、岩坪 純子、宮崎 彩香

発掘調査臨時職員

青木 佐智子、案納 哲夫、石橋 康子、鐘江 清、國武 三歳、田中 樹子、中村 麻衣
 福田 猛、藤木 幸子、堀江 俊文、森山 美千代、柳 鈴子、山口 誠也、山下 洋子
 山田 治代、由布 幸子、渡辺しげ子、渡辺やつ子

整理臨時職員

久保田 くみ子

3. 調査の目的と経過

古町遺跡はこれまで発掘調査が実施されていなかったが、試掘調査では遺構とともに弥生土器や土師器、瓦器、近世陶磁器などの遺物が確認されていた。そこで、本調査では試掘調査において検

出された遺構の広がりの確認を目的とした。平成 29 年 10 月 19 日に重機で表土剥ぎを開始した。翌々日から遺構の検出を行った。その後、平板測量によって遺構配置図および地形図を作成し、終了した部分から掘り下げを開始し、個別の遺構図の作成を行った。11 月 24 日に気球による調査区全体の空中写真撮影を行い、追加で個別の遺構図の作成を行った後に、発掘機材の撤収をし、11 月 30 日に現地における全ての作業を終了した。

遺構配置図はトータルステーションを用いて測量し、測量データは株式会社 CUBIC 社製の「遺構くん cubic」で編集・保存した。ただし、一部の遺構、土層図は水糸メッシュ法 ($S=1/10$) で記録した。記録写真は、モノクローム、カラーリバーサルともにマミヤ RB67 で 6×7 判で撮影した。

II. 位置と環境

久留米市は筑紫平野の中心部に位置し、筑後川の中流域に面する。古町遺跡は太刀洗川の左岸の低地に位置する。標高は約 10m を測る。

周辺では、北大手木遺跡で弥生時代中期後半の堅穴住居群や土坑が検出されたほか、北隣の彼岸遺跡では、前期中頃から後期初頭まで連綿と集落が営まれており、堅穴住居が見つかっている。墓地としては、彼岸遺跡では、中期前葉の甕棺墓も 1 基検出されており、加えて十郎丸長谷古遺跡で小形の甕棺とみられる甕棺墓が試掘時に確認されている。

古町遺跡と大刀洗川を挟んで位置する宮ノ陣町の樋ノ口遺跡では甕棺墓が検出されている。それに加え、堅穴建物や倉庫とみられる 6 世紀の総柱建物が発見されている。

今山向オノ木遺跡では古墳時代初頭の集落が見つかっており、関西系の土器が出土している。

この他、北大手木遺跡で 9 世紀後半の井戸や土坑が確認されている。また、道路状遺構も見つかっている。その規模から古代官道である可能性が指摘されており、小郡方面と北野天満宮を結ぶルートが想定されている。陣屋堂出遺跡では古瓦や「次成」の刻書がある 9 世紀後半の土師器が出土するなど官人層の存在が示唆される。

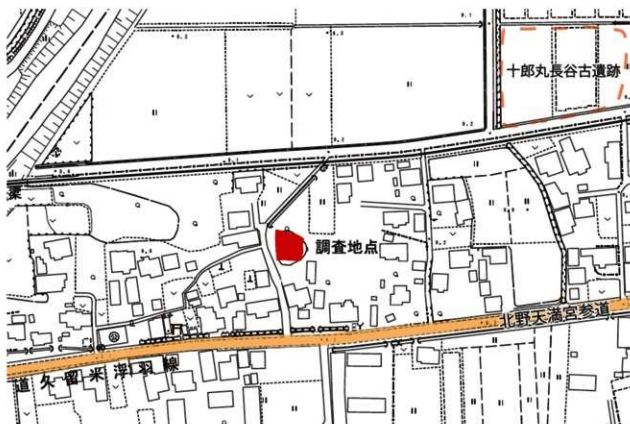
古町遺跡南側を東西に走る県道 81 号線は北野天満宮の参道の名残で、北野天満宮はその東端に鎮座する。江戸時代末期の作とみられる『筑後國北野天神縁起』によると、その創建は天喜 2 年 (1054) まで遡り、山城国北野天満宮の社領である河北荘の成立に伴う勧請と考えられている。同縁起には、正治年間 (1199～1201) に源頼朝から、元中 4 年 (1387) に足利義満から社領の寄進があったという記述があり、課役の免除などで優遇された様相が窺える。現在の社殿は承応年間 (1652～1654) に有馬忠頼が再興したもので、明和年間 (1764～1771) に有馬頼貴が改築した。

本調査地付近の字名は「十郎丸」で、河北荘の名田に由来するという。茶屋敷遺跡で青磁碗が伴う溝や土坑、陣屋堂出遺跡から 13 世紀の井戸が検出された。中世の貿易陶磁器は、中厨子田遺跡や陣屋堂出遺跡でも細片が出土しており、また、茶屋敷遺跡では「宣徳年造」の銘を有する染付碗が出土した井戸があり、同時期の集落の存在が示唆される。



1. 古町遺跡 2. 北大手木遺跡 3. 彼岸遺跡 4. 十郎丸長谷古遺跡 5. 樋ノ口遺跡
6. 今山向才ノ木遺跡 7. 今山堂屋敷遺跡 8. 茶屋屋敷遺跡 9. 陣屋堂出遺跡 10. 陣屋堂屋敷遺跡

第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/25,000)

Ⅲ. 調査の記録

(1) 検出遺構

調査対象地は宅地と農地として利用されていた。宅地部分が今回の調査地点である。調査地点は周辺と比較して 2.3m 小高くなっている。

今回の調査では、中世以降に造成された積土状の形跡とその上面で近世以降の建物跡を検出した。柱穴からは近世以降の遺物が出土している。

積土状遺構 (第3図)

検出面以下 0.6m は灰褐色や橙色のブロックを含む砂質土であり、その下 1.0m は褐色のブロックを含む砂質の黒褐色土である。砂質の黒褐色土下は砂質の褐色土が見ら



第3図 古町遺跡第1次調査遺構配置図 (1/200)

れる。調査区南東隅から 11.0m×10.0m の方形を呈した黒褐色土の範囲 (第3図のアミカケ部分) とそれ以外の黒褐色土の範囲が確認された。

SB1 (第3図)

積土状遺構の上面で確認された建物跡である。東西4間×南北4間の母屋と、母屋の西部と南西部に1間分の廂あるいは縁を確認した。柱間は1.0mあるいは2.0mを測る。柱穴内には3~4cmの栗石が詰まっており、土師器や近世陶磁器が出土している。

(2) 出土遺物

今回の調査では、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、近世の陶磁器などが出土した。遺物の総量はパンコンテナー3箱分である。幅広い時期の遺物が出土しているが、大半の遺構では近代以降の陶磁器などが伴う。



第4図 調査区全景 (南から)

IV. 総括

今回の調査では2ヶ所の積土と、掘立柱建物等を確認することができた。調査区域で検出された遺構のほとんどが近世以降のものであるが、遺物に関しては弥生～近・現代のものまで共伴して出土している。当遺跡は大刀洗川の攻撃斜面に立地し、周辺では川の氾濫など水害も発生していたと想定される。実際に近現代になり十郎丸周辺では屋地盛りや水屋、あげ舟などの水防対策がなされていたという。よって、近代以前においても、度重なる水害に対して積土を行い、その土地に住居を構えるという、地形に応じた造成が行われていたのではないかと考えられる。なお、出土遺物および検出遺構については、今後も検討を加えていきたい。



第5図 調査区から大刀洗川を望む（南から）



第6図 調査区から北野天満宮を望む（西から）



第7図 調査区遠景（南から）



第8図 試掘トレンチ（西から）



第9図 SD37 完掘状況（東から）



第10図 SK11 遺物出土状況（南から）

報告書抄録

ふりがな	ふるまいせき だいいちじはつくつちようさほうこく							
書名	古町遺跡 第1次発掘調査報告							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書							
シリーズ名番号	第396集							
編著者名	大隈 彩未							
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課							
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3				TEL 0942-30-9225 FAX 0942-30-9714 Email:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp			
発行年月日	2018(平成30)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
ふるまいせき 古町遺跡 第1次調査	く る め し きたのまち 久留米市北野町 じゅうろう まる 十郎丸1420外	40203	660001	33 ° 20 ' 36 "	130 ° 34 ' 14 "	20171019 ～ 20171130	288㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特 記 事 項	
古町遺跡 第1次調査	集落	弥生 ↓ 近世	積土状遺構 建物跡	2箇所 3棟	弥生土器、土師器 須恵器、瓦器、瓦 近世陶磁器、金属器 等		積土状の遺構と近世以降の建物跡が検出された。	
要 約								
今回の調査では、中世以降に造成された積土と思われる形跡や近世以降の建物跡を検出した。弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦、近世陶磁器、金属器等が出土したが、大半の遺構では近代からの陶磁器などの混入が見られた。当遺跡は、大井洗川の攻撃斜面に立地し、周辺では川の氾濫など水害も発生していたと想定される。近代以前においても、度重なる水害に対して積土を行い、その土地に住居を構えるという、地形に応じた造成が行われていたのではないかと考えられる。								
土木工事の届出日		平成29年6月23日			遺物の発見通知日		平成29年12月4日 (29文財第1253号)	

古町遺跡

— 第1次発掘調査報告 —

久留米市文化財調査報告書 第396集

平成30年3月31日

発行 久留米市教育委員会

編集 久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷 服部印刷株式会社

久留米市梅満町410-1